月刊
えくてびあん
立川と語ろう 立川に生きよう
11
<EKUTEBIAN VOL.8 NOVEMBER 1991-EKUTEBIAN>
まい あーと■レリーフ「ひだまり」by 関谷悦子

一枝の影も欺かず

俳人、中村草田男。立川の根川にその句碑が建てられた。「冬の水一枝の影も欺かず」、実はここ立川の柴崎町普済寺で、この一句を作っていたということをご存じでしたか？草田男、創刊の俳誌『萬緑』の五百号記念を機に、建立。道ゆく人に詩情を与える。

『萬緑』を代表して、川合絹激氏、立川市長に句碑の目録を贈る。

中村草田男の長女三千子さんも句碑建設の喜びを語る。

歌人・若山旅人氏（富士見町）も、祝辞にかけつける。

『萬緑』の同人、立川市民俳句会の面々、句碑建立を喜びあう。

いよいよ幕が……注目の一瞬。草田男の四女、依子さんと立川市長により句碑が序幕される。

空かんが教科書に変わった日

★雲仙にまで届いた七小生徒の熱い気持ち★

多摩26市の中で、ゴミ排出量が最も多いという立川。ＯＥＣＤ(23ヵ国)のリーダーとしての日本。小さい時から自分達の住むところは自分達で責任を持って護っていくのは人間の鉄則である。環境問題がウンヌンされている中、我が七小の生徒たちは目を輝かせて、空かん集めに熱中。教育効果を高めた上に還元金が雲仙に届くという朗報が編集部に舞込んだ。

●空かんを教材にできないか

空かん一つで二円だという。五個で10円。この還元金を児童会活動に使うというアイデアを思いついたのは、立川第七小学校の尾形校長。使えるもの、使えない物を分ける、同じ類のものをまとめることを通じて、分別の知恵も身につけてくれたら。また、どんなものにも生命があるように物にも生命がある。それを大切にする心を持ってもらえたら、そして、やがては、人間も同じということを、わかってもらえたら、と。

●校長先生、雲仙に送りたいんです

尾形校長は児童会名義の通帳を作ってあげた。還元金は、三月からはじめ、八月には既に空かんが七万円に変身していた。そこへ、雲仙災害のニュース。児童会で、生徒たちが話し合い、空かんのお金を義援金として送りたいと校長先生に言ってきた。「ユニセフもあるよ」と尾形校長が、生徒に言うと、「世界よりまず、日本人の方が先だ」と言ってきたという。

親からもらうおこづかいは、もらうお金。空かんのお金は自分達で汗して残したお金。「ああ、いいことしたね」と言うと胸張る姿がとても凛としていたという。

「なるようにしかならない」という十一文字は、あきらめ。「なるようになる」という七文字。この差、四文字に、環境問題はある。それを生き方の質として気づいてくれたら、という一休禅師の言葉で語ってくれた。

どこか、明るいものを感じ、校門を後にした。

「うーん大変だなあ」と言いながら空かんつぶしに汗する七小生徒たち

くるり立川 20

十一月ともなると朝晩はぐんと冷え込んで、冷たい露にぬれた野草たちも早足で晩秋の色へと染められていく。草もみじの始まりである。立川でもわずかではあるが草もみじの見られる場所は、多摩川の河川敷や昭和記念公園周りの草地、立川で少し残る水田の中、また畠地の周りなどで、意外とも思われる美しさに出合うことがある。夏から秋にかけて、一、二度草刈りが行われ新しく芽吹いたやわらかい草にその色づきが生じる。

この頃は、草たちが盛んに種子を蒔き散らす季節でもある。セイヨウタンポポは初春から晩秋まで一年中花を咲かせては種をつける。朝露にぬれた白色の綿帽子のような冠毛は見事な芸術品だ。日が当りやがて身軽るになると、さっさと風に乗って旅立つ。オナモミやイヌコズチ、キンミズヒキは、人間を含む動物たちにしっかりとくっついて適地に運ばれていく。ゲンノショウコの種子は、強いばねになっている殻からはじき出されて遠くへとぶ。実を出したときそり返った姿が御輿の屋根に似るのでミコシグサとも呼ばれている。ススキ、オギ、メリケンカルカヤなど種に綿毛をつけた植物はたくさん見られるが、何と言っても、絹糸のような美しく大きな綿毛をつけたガガイモが殻から飛び出す光景は自然が生み出す見事な光景だ。

（鈴木　功）

ガガイモの種子

ことわざ問答 20

漢字一字挿入せよ

▼遠水●火を救わず

▼大きい薬罐（やかん）は沸きが●い

表紙は語る

まい　あーと■レリーフ
ひだまり by 関谷悦子

銀杏の色も黄付き、八百屋の店先にはみかん。街行く人も、ジャンパーやウィンドブレーカー姿が出現。冬があちこちに顔を出す今日このごろになりました。

さて、今月、表紙を飾ってくださったのは、アートサロン四季(曙町)で先日、個展を開いた関谷悦子さん。関谷さんは、昔、油絵もされていたが、お友達の勧めで、軽い気持ちで木彫りをはじめてみたというのがこの腕前。能も嗜み、いろいろな人生コースを経て、木彫りに到達。「人生の最後の楽しみではじめました」と語る関谷さん。

「自分の人生の全てを顧みて、自分自身をまとめ、表現できたら、嬉しく思います」と。それでも、周りの方々の支えでやってこれたんだと思います、とひかえめ。自然が好きで、山荘で暮らすことも多いという。

そういう作者の心優しさがこの作品にも表われ、浮き彫りにされている。

立川・トピックス

佐藤氏、広報功労賞　都内二十六市ではじめて

今年四月の異動まで十四年間、広報活動にあたってきた立川市役所、元広報課長佐藤高之氏がこの程、日本広報協会から広報功労者として表彰を受けた。

都内二十六市からは、はじめての受賞である。「広報たちかわ」の取材執筆をはじめ、紙面活字の大型化。自らお祭りを企画し、その台本も書き、また、ゴミ問題をいち早く取り上げ、言葉だけで終らせず、実際に十年前から市報を再生紙で発行する等。広報マンとして原点に帰ってモノを書く姿勢を貫いた。

童話作家 森 忠明氏(曙町)　野間児童文芸賞受賞

「立川は、なかなか絵になるんだけどねぇ」と語ってくれたのは、曙町在住の童話作家、森　忠明氏。「ホーン岬まで」(くもん出版)で、野間児童文芸賞を受賞された。

十九才で詩才を寺山修司に認められ師事。昭和三十年代の少年の瞳に最もキラキラしていたタチカワ・ワールドを書き続けて二十年。

そのユニークぶりも「君、やっぱり立川なんだねぇ」(寺山修司から)と感慨深げに言われていた程。

立川と主人公によるポエティックな世界を覗いてみれば卓越した"何か"が広がっていくのがわかるだろう。立川が新しく見えてくる。

立川クイズ

このあたりの多摩川の川原にとても珍しい植物が自生しているのをご存知でしょうか。分布が限られ、しかも植物学上、最初に発見されたのがここ立川、という貴重なもの。昔よりずい分少くなっているそうですが、毎年けなげに咲いているその花の名は？

【10月号の答】③

府立二中（現立川高校）の運動会は地域の数少ない楽しみの一つで、大勢の見物人で賑わったそうです。創立間もない明治43年にはその数一万数千人に及んだとか。地元からは山のような賞品も贈られて、まさに三多摩の一大イベントだったわけです。

10月号では第一回目(明治34年)の見物人の数として出題しましたが、明治43年の折の数でしたのでお詫びして訂正いたします。

真如苑だより

菊花薫る候、とはよく云ったもので天候不順の今年ですが、確実に秋色濃くなってまいりました。街のそこここで菊花まつりが催されております。秋の薫り豊かな真如苑へ、どうぞ、涼やかにお出掛けください。

■日時　11月15日　午後2時～4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民(成人)に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」(本誌を手渡してくれた人)へ。

ことわざ問答 答

遠水近火を救わず

遠くにいては、急場の役には立たないというたとえ。遠い親戚より、近くの他人。

大きい薬罐は沸きが遅い

優れたものや度量の大きい傑物は、そう簡単に成るものではない。大器晩成。

東風

落語に、風流を気取って俳句をよむ噺がある。テーマ（俳句のほうでは兼題とか、席題というらしい）は「春雨」。八ッつぁんだか熊さんだかが「ガリガリと船底かじる春の鮫」とやって笑いをとるという寸法だ●俳句のお笑いに、なんにでも「根岸の里のわび住い」を付けるのがある。「秋深し根岸の里のわび住い」「落葉散る根岸の里のわび住まい」「初雪や根岸の里のわび住い」●根川緑道に建立された草田男句碑「冬の水一枝の影も欺かず」とはじめて出会った時、どう読んだらいいのか解らなかった。ツマズキは「一枝」にある。俳句に馴染みがない人間はつい「ひとえだ」と読んでしまう。そうすると、全体が五七五のリズムを崩してしまう。このことを人に話し話し、ようやくにして「いっし」という読みに辿り着く。なんとも気恥かしい。もっとも「草田男」をソウデンオトコと読んだ豪の者もいるくらいだから「一枝」の読み違いくらいで驚くこともないか●俗に詩人は三万、俳人三百万人という。短いから、多いというわけのものではあるまい。五七五のリズムが日本人の躯には染み込んでいて、日本語とよほど相性がよいのであろう。谷川水車先生が中心になって活動している立川市民俳句会は、いつも盛況だ。街にあふれよ「うたごころ」！一句ひねりますか●飛石をふむ音一つえくてびあん

（編集）小川知子　坂本弘子　勝川　環　中村裕里　原田悦子　手沢正弘　町田健一　山田恵子
（写真）天野武男　坂橡一明　井上義治　スタジオ269　枝川一巳　本多　修

月刊えくてびあん　第88号
平成三年十一月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町1-3-37-303
磐城ビル3F　〒190
電話　〇四二五(28)〇〇八二
FAX　〇四二五(28)一二九七
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　㈱大廣社

私の傑作選

NICE SHOT! NO.4

誰のアルバムにもキラリッと光る一枚がある。
撮れた！と思った。シャッターが軽い。

野村義重さん
（柴崎町4丁目）
愛機➡ローライフレックス
■すすき
多摩川の芒を蒼くそよかせて　流るる風に音も聞かむか

有馬君雄さん
（柴崎町3丁目）
愛機➡ニコンF4
■御車と斜塔

多摩川の芒を蒼くそよかせて
流るる風に音も聞かむか　吉